

研究ノート

明治期の新聞が伝える広島野球創成期

渡 辺 勇 一\*

1. はじめに

これまで、広島における野球の嚆矢は1889(明治22, 以下同は明治)年頃とするのが定説であった。根拠は広島県内で最も古い旧制県立中学校である広島尋常中学校<sup>1)</sup>の校友会が1897(同30)年に発刊した校内雑誌「鯉城」創刊号の「野球部報」の記述である。無署名ながら「野球は明治22, 23年頃には活動していた」とする記事が掲載された。以来、広島野球の起源は同中学校の1889年説が語り継がれていき、県内野球史<sup>2)</sup>の底本にもなっていった。

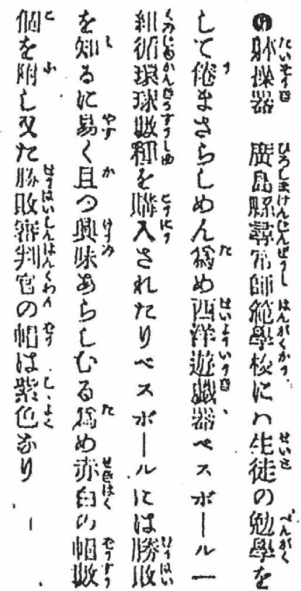
ところが、それより古い時期に野球用具を入手していたことが判明した。1886(同19)年10月28日付の日刊紙「芸備日報」は、広島県尋常師範学校<sup>3)</sup>が「ベースボール1組を購入した」と報じていた。少なくとも、広島尋常中学校で興じ始める以前に野球用具があったことは事実のようである。ゲームに活用していたかどうかは別の問題として、広島野球の事始めは通説の3年前までさかのぼることになりそうである。

以後の野球濫觴期の歩みに関して、広島の地方紙である「芸備日日新聞」(芸備日報の後身)と現存する「中国新聞」の紙面から、創成期の広島野球の足取りをたどる。

2. 県尋常師範学校と野球

2.1 西洋遊戯器ベースボール

芸備日報が1886年に伝えた記事は「●躰操器



の躰操器 広島県尋常師範学校に生徒の勉学をして倦まさらしめん爲め西洋遊戯器ベースボール1組、循環球数種を購入されたりベースボールには勝敗を知るに易く且つ興味あらしむる為め赤白の帽数個を附し又た勝敗審判官の帽は紫色あり

図1 1886年10月28日付芸備日報 赤白や紫の帽子も同時に購入している。

(たいそうき)」の見出しとともに、以下のように記述する。「広島県尋常師範学校には生徒の勉学をして倦まさらしめんため西洋遊戯器ベースボール(原文)1組、循環球数種を購入されたり。ベースボールには勝敗を知るに易く且つ興味あらしむる為め赤白の帽数個を附し又た勝敗審判官の帽は紫色あり」とする103字の雑報である(図1)。

記事にある「ベースボール」とは当然「ベースボール」の誤記であろう。1組とあるからには、ボール以外におそらくバットもセットであったに違いない。

「循環球」とは何であろうか。文献によると英国で発展した「クロッカー」という球技のこ

\* 広島経済大学経営学部スポーツ経営学科教授

とであった。ゲートボールに似た競技で、マレーと呼ぶスティックで、カラフルなボールを打つゲームであり「芝生の上のビリヤード」とも呼ばれるという<sup>4)</sup>。明治期に日本に伝わり、改良を重ねて独自に根付いたのがゲートボールである。

野球や移入されたばかりのクロッケーの用具を誰が、どうやって購入したのであろうか。当然ながら、こうした競技や用具の製造・販売元、使用法を知りうる者がいなければならない。

手掛かりは東京・上野公園で1881(明治14)年に開催された第2回内国勸業博覧会で展示された教育用品の中にあつた。

同博覧会の「文部省教育品陳列場出品目録」<sup>5)</sup>によれば、運動用具を出品したのは3年前に開校した日本最初の体育の研究・教育機関、体操伝習所(東京神田・一ツ橋)である。伝習所は19項目の教育用品を提供したが、その中の戸外遊戯器具類には「循環球(クロッケー)用品1組(価3円75銭、神田紺屋町、渡邊徳次郎製)とベースボール用品1組(球4個、打球棒2本、価1円40銭、神田美土代町、森田金兵衛製)と米国製の蹴鞠(ゴム製フットボール、価8円)があつたという。

体操伝習所の後身である筑波大学付属図書館の特別展(1999年)目録「身体と遊戯のまなざし—日本近代体育黎明期の体操伝習所」<sup>6)</sup>によれば、循環球製造の渡邊、ベースボール用品の森田とも、同伝習所の米国人教師A・リーランドや米国留学経験のある教師、坪井玄道が示した見本や指導を受けてこれらスポーツ用品を作成したという。東京には既に運動具メーカーが存在していたことがうかがえる。

## 2.2 師範学校教師、竹本重雄

芸備日報が1886年に報じた「ベースボール」購入の由来は、体操伝習所に関係ある人物の介在なくしては成り立たない。後述するが、日本に

米国仕込みのベースボール(野球)が渡来したのは1872(明治5)年<sup>7)</sup>とされている。当初は東京近辺の学生たちが興じていたに過ぎなかった。したがって、野球に触れていたのは東京に在学した者に限られよう。

主に小学校の教師を養成する広島県尋常師範学校(略称県師)に当時、東京にゆかりのある者がいた。1882(同15)年9月から1年余り、体操伝習所で研修していた県師助教諭の竹本重雄<sup>8)</sup>である。勸業博覧会は前年3月から6月までの開催であり、竹本が上京した時には1年前に終了していたが、展示品は校内で目にするると同時に、実際に使っていたであろう。

竹本の研修名目は、東京師範学校師範学科取調員が正式名称であつた。期間中、体操伝習所(体操)、音楽取調掛(音楽)でも同時に研修し体育や音楽の基礎から学んだのである。まだ十分な教育制度とは言えず、とりわけ各地の師範教育は専任教員も不足するなど未発達であつた。このため文部省は前年から東京師範学校(後に東京高等師範学校)での専門教育の教授法を模索し、全国の小学校あるいは師範学校教員でいくらかの実地経験のある者を募集した。集まつたのは28人で、竹本は広島県から唯一の研修生であつた<sup>9)</sup>。

東京師範学校では主として教育学や学校管理法、諸学科の教授法を学び、体育は体操伝習所、音楽は取調掛で研修を受けた。体操伝習所に寄宿し、無事終了したのは22人で、音楽の履修に手間取つた竹本が卒業試験に及第したのは他の研修生たちより5カ月遅れた83年12月だった<sup>10)</sup>。

竹本の来歴さらに示すと、広島県御調郡西野村(現、三原市宮西町)の出身で、1877(同10)年12月、広島県師範学校下等科を終え、翌78年7月、同師範学校上等科を卒業している。ちなみに広島県の師範学校は1874(明治7)年に白鳥学校として開校し、77年県師範学校となった。いわば竹本は県師1期生といえよう。

1880（同13）年11月、県師助教諭に採用され舎監を兼ねた。若手教員としてスタートした直後、東京での研修に参加したのである<sup>11)</sup>。

研修を終えて県師に復職した竹本は、東京で学んだ体育や唱歌（音楽）に力量を発揮したという。1884（同17）年から2年間は広島尋常中学校の教員も兼務<sup>12)</sup>した。この時期、広島市内の出版社から「新小学体操書」「小学法令摘要」「小学教授法」を相次いで出版するなど精力的な執筆活動も行っている。

東京で最新の体育科教授法を会得して帰広した竹本が、体操伝習所で見聞した西洋遊戯器の実物を県師で購入、活用したと考えても不思議ではない。芸備日報の報じる「躰操器」は体操伝習所に由来するものであろう。ただし、竹本がこの時期に県師でベースボールを奨励したかどうかは定かではない。

竹本はその後県師付属小学校主幹などを経た後、1897（同30）年に新設された県の視学となり、5年間県教育行政の中樞<sup>13)</sup>にいたが、1903（同36）年の教科書疑獄事件に関与し取賄容疑で逮捕、重禁固刑（75日）に服した。

### 3. 野球と新聞ジャーナリズム

#### 3.1 初期の野球報道

前述のように日本にベースボール（野球）が伝えられたのは1872年である。現在の東京大学の前身、第一大学区第一番中学校で英語と数学の米国人教師、ホーレス・ウィルソンが持参したボールやバットで学生たちと興じたという。ゲームというよりノック練習であったようだ。

ウィルソンが持ち込んだベースボールは、一部の学生が興味を示しただけであったが、米国で鉄道技術を習得した技師の平岡熈（ひろし）が1878（明治11）年、新橋鉄道局の同僚に呼びかけて最初のチーム「新橋アスレチック倶楽部」を結成すると、広がりを見せ始めた<sup>14)</sup>。やがて、都下の学生たちが追随した。

82年（同15年）に駒場農学校（後の東京大学農学部）が最も早くベースボール部を創設し、翌83年には青山の東京英和学校（同・青山学院大学）に、84年は虎ノ門の工部大学校（同・東京大学工学部）、神田・一ツ橋の東京大学法学部にも誕生した。さらに築地の東京一致英和学校（同・明治学院大学）、三田の慶應義塾にもチームができ、競って新橋倶楽部に教えを乞うた。1888（同21年）になると、新たに誕生した第一高等中学校（一高、後の東京大学教養学部）にもチームが生まれ、こうした官学や私学の卒業生たちが地方の伝播に重要な役割を担っていた<sup>15)</sup>。

米国渡来の野球を当時の新聞はどう扱ったのだろうか。明治初年に創刊した各地の新聞はさまざまな告知記事を掲載したが、スポーツとしての野球を記事化したものは多くない。むしろ、江戸期の諸大名のお抱え力士らに由来する相撲の記事が幅を利かせていた。国内スポーツ記事第1号とされる東京日日新聞（現毎日新聞）の「相撲天覧の記」は1881（同14）年5月14日付で掲載された。1884（同17）年には読売新聞が両国回向院の角力勝負付けを載せるなど、日本の新聞の初期のスポーツ記事は相撲が主流を占めた。

伊東（1976）が1879年から1907年までの34年間に、全国の新聞51紙に載った野球に関する記事を調査、検討した「明治時代の新聞記事 野球編Ⅰ」<sup>16)</sup>とする労作がある。

それによれば最初の野球記事は1879（同12）年5月30日付、横浜毎日新聞の「横浜の球投げ場－外人が拡張の計画」とするもので、外国人居留地のグラウンド（球投げ場＝野球場）拡張案を取り上げた。次いで、1885（同18）年「駒場農学校のベースボール会」（11月14日付東京日日新聞）、1888（同21）年「一高、駒場農学校に敗れる」（11月3日付読売新聞）、1889（同22）年「平岡熈の運動場開設計画」（1月15日

付時事新報), 1890 (同23) 年「一高対明治学院 インブリー事件」(5月29日付朝野新聞)と続いた。決して多くはない。そして, 1896 (同29) 年, 「天下無敵の一高ベースボール軍 横浜外団に勝つ」(5月25日付読売新聞)と, 初めて一高チームが横浜の外国人団に勝利した長文の記事が載った。以後, 一高は3度外国人チームと対戦しすべて白星に輝いた。新聞はこぞって大きく紙面を割き, 地方の新聞にも掲載された。このころ「野球」の邦訳<sup>17)</sup>が生まれるのである。

広島の地方紙にベースボール(野球)の記事が載ったのは県師の西洋遊戯器購入から7年後の1893(同26)年である。芸備日報の後身, 芸備日日新聞が4月5日付で「●『ベース, ボール』会」なる記事を掲載した。「当広島尋常中学校にては予ねて『ベースボール』会というを設けるが佃参事官もその名誉会員の一人なり。しかるに氏は今回栃木県参事官に転任したるに付き同学校生徒一同は送別の為今五日「ベースボール」会を催すよし(後述略)」というものである。県の幹部職員である参事官の佃一予(つくだ・かずまさ)氏が転任することになり, 指導を受けてきた尋常中学校の生徒たちが送別試合をするというものである。翌6日付では開催したことを知らせ, 「県師の職員生徒も参加した」と補足した(図2)。

記事にある佃一予は愛媛県出身の内務官僚で一高や東京大学法学部の学生時代, 同郷の俳人正岡子規と同じ寄宿舎で暮らし, 互いに野球を愛好したという。子規の著作には若き佃投手の紹介<sup>18)</sup>もある。県の高官として赴任した広島では, 同好会組織である尋常中学校ベースボール会に足しげく通い, 生徒たちに親しまれた。佃の指導を機に尋常中学校は1892(同25)年10月, 「ベースボール会」を野球部組織として発足させた。

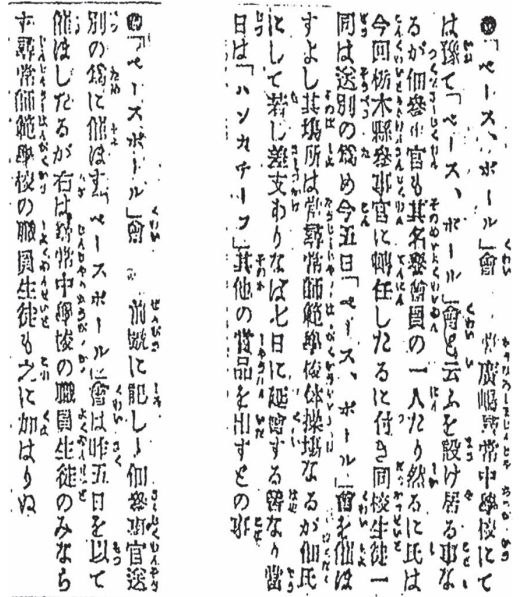


図2 ④1893年4月5日付, ⑤同4月6日付芸備日日新聞

### 3.2 隣り合わせの尋常中学校と県師

野球用具をいち早く購入した県師と, 県内で最も早く野球を楽しんでいた広島尋常中学校は1880(同13)年から91(同24)年まで同一の敷地内に校舎があった。広島市竹屋村(現中区竹屋町)にあった県師は79年に火災で焼失し, 下中町(現中区中町)の中学校(当時は県立広島中学校)へ同居したのである<sup>19)</sup>。このため, 県師が購入した用具を通じて野球を知り, ベースボール会の結成をみたと推測できる。

佃参事官送別試合の後, 地元紙に野球報道は途絶えた。むしろ, この間の野球事情は広島尋常中学校の校内雑誌「鯉城」掲載の「野球部報」に詳しい。「鯉城」は広島城の別名であり, 城下町広島を象徴するその名を尋常中学校は校内雑誌の誌名に採用したのである。

参事官送別試合では中学校が18-9で県師を圧倒した。熱心に指導したのは寄宿舎舎監, 吉田彦松教諭であった。吉田教諭は1879年同中学校卒業の1期生<sup>20)</sup>であり, 進学したのは近代農業教育研究機関である官立の駒場農学校農

芸化学科であった<sup>21)</sup>。東京で他校に先駆けて野球部をつくり強豪で知られた学校である。吉田が野球部員だったかどうかは判然としないが、後に出版された「一高野球部史」には1886(同19)年卒業の農学校同期生たち3人が名選手として記述されている<sup>22)</sup>。予科・本科計6年間学び、農・農芸化学・獣医3学科併せて1学年30人足らずであり、当然彼らに刺激されて吉田らも野球の腕に覚えがあったはずであろう。

若い先輩教師の吉田が後輩の野球部員を鍛え上げている姿が想像される一方で、同じ敷地内の県師にも駒場農学校卒業生がいた。吉田と同期で、農学科を出た片田豊太郎<sup>23)</sup>である。2人は1875(同8)年ごろ、尋常中学校の前身である広島英語学校で一緒に学んだ仲<sup>24)</sup>でもあり、同じ農学校を卒業後隣り合った校舎で野球の手ほどきをしていたのである。

「鯉城」野球部報によれば、吉田の鍛えた寄宿舎生がことごとく卒業した後、野球部は消滅しかけたが1895(同28)年には5年生を中心に再興し、翌96(同29)年の同窓会(後に校友会と改称)発足とともに野球部は部活動組織としてその中に位置づけられた。11月には「強軀健志」を養うこととする細則を定めて再始動したのである。野球用具は学校から貸し出され、修繕費として1組6銭を徴収したという<sup>25)</sup>。

吉田は野球部再興を見届けて95年に中学校を去り、兵庫県農事試験場へ移って以後農業教育に尽力して明治、大正期の17年間、兵庫県立農学校校長を務めた<sup>26)</sup>。片田も吉田と同じ年に県師を退職し、鹿児島県や大阪府で農学校の校長<sup>27)</sup>となっている。

### 3.3 広島尋常中学校野球部と新聞報道

明治初年、米国から日本に渡ったベースボール(野球)が全国に広がりを見せるのは1880年代後半の明治20年代以降である。東京の諸学校に広まり、1896(同29)年一高が外国人チーム

に3連勝したの機に全国へ普及の兆しを見せた。とりわけ各地の中学校が敏感に反応した。

森岡(2015)によれば、東京以外の中学校で早くから野球を導入し野球部をつくったのは1884(同17)年の岩手・盛岡中学校、岐阜中学校とされ、以後、秋田中学校、長野・松本中学校、大分中学校などに広まっていく。広島尋常中学校が始めたとする1889(同22)年には高知第一中学校、新潟・長岡中学校などでも野球が行われ、92(同25)年には愛媛県の松山中学校も創部した<sup>28)</sup>。

全国的に普及の兆しを見せる中で、広島尋常中学校(97年から第一尋常中学校)は校内での紅白戦に明け暮れていた。唯一の対戦相手はようやく校地が分離した県師だった。野球部報<sup>29)</sup>によると5年生チームは96(同29)年10月20日、県師に28-10と大勝し、11月18日、同21日にも勝っている。芸備日日には11月の同窓会細則の記事は掲載されたが、なぜか県師との試合は載っていない。まだ、野球そのものへの関心度が低く、新聞社内に競技を理解する者が少なかったのかもしれない。しかし、翌1897(同30)年になると、しばしば野球記事が紙面に登場するようになった。表記は依然として「ベースボール」が多いものの、時折「野球」の用語を使用した。一高OBの中馬庚が野球の邦記を考案したのが95(同28)年であり、2年後には広島へ到達したことになる。

広島県第一尋常中学校と校名改称した野球部は1897(同30)4月、遠征した山口県の岩国尋常中学校を32-19で下した。5年前の明治25年創刊の中国新聞(当時の題字は「中国」)は4月25日付で報じた。前日告知記事載せた中国は「尋中生徒の勝利」の見出しで、得点経過を中心に事細かに報道した。「キャッチャー」「ピッチャー」「ホームベース」などの用語も織り込み、同日付の芸備日日の記事を大きく上回る分量であった(図3)。

尋常中学生の勝利 山口縣岩國學校生徒と尋常一尋常中學校生徒が野球競技を二十三日午後本市國泰寺村廣島高等小學校用師範學校附屬操場にて試むる由に巴之ヲ掲げたるが該競技の暇に早くも諸所に傳はりたるを以て正午過ぎより之を見物せん爲め全所に出押きたるもの多く殊に學校教員學校生徒等は萬きまで多数を占たり斯くて午後零時三十分岩國學校第三年級中の選手九名は亦帽を戴き夫々部署を定めてベースに就きキャッチャー、ピッチャー及びインフィールドもまた定め位置を占むるや尋常中第三年級中の選手九名は白帽を被りて順次フォアベースに出で互に愈々競技を初めたるが交互九回の一勝負終りたるは午後三時半にして結局尋常中学生は岩國學校生徒の得点十九に對する三十二点即ち十三点の勝利を得たり今其毎回の交互得点を左に掲ぐ因に記す中もあるは尋常中学生にして岩さあるは岩國學校生徒を示せしものなり

第一回 中二点、岩零点。第二回 中零点、岩零点。第三回 中六点、岩一点。第四回 中八點、岩七點。第五回 中三點、岩三點。第六回 中三點、岩零点。第七回 中一点、岩三點。第八回 中九點、岩一点。第九回 中零点、岩四點。合計中三十二點、岩十九點。

図3 1897年4月25日付中国新聞 (広島尋常中学校-岩国尋常中学校の試合)

尋常中学校と県師の対戦もこの時期の紙面を飾り、試合でのトラブルが報じられている。同年6月15日付中国新聞は「両校生徒の衝突(野球競技)」として、52行(1,142字)を費やして詳報した。記事によれば、県師校庭で6月12日に行った試合の九回、リードしていた県師側の審判が自チームに有利な判定を下したとして中学校側が抗議して暴力沙汰が生じた。いったんは県師側が謝罪したものの、にらみ合いが続いたという。

また、夏休みを利用して帰省した学生たちが後輩を指導する例もあったようだ。広島出身で法科大学(現東京大学法学部)在学生の山田示元<sup>30)</sup>は尋常中学校を指導(8月25日付芸備日日)し、翌年の夏には東京在住の学生40人が帰省して尋常中学校野球部と対戦、ボートレースの競漕にも参加した(1898年7月12日付芸備日日)との記事も載った。

#### 4. 中学野球の発展

##### 4.1 浸透する県下の中等球界

明治20-30年代初期の県中等学校球界ではまだまだチーム数は少数である。広島では1892年(明治25)年に県参事官の佃一予や駒場農学校出身の教師、吉田彦松らの支援を得て「ベース

ボール会」を立ち上げた県立広島中学校(後に尋常中学校、県立広島第一中学校)とこれも駒場農学校卒業の片田豊太郎が指導した県尋常師範学校の両校を嚆矢とし、翌93年に福山尋常中学校が校友会に遊技部を設置し、ボート、ベースボール、陸上運動の3競技を設けた<sup>31)</sup>。

1898(同31)年8月11日付の芸備日日によれば、「福山だより」として、福山尋常中学校(後に福山中学校)が遠来の香川県高松尋常中学校と試合をして勝利したとする短信を載せた。同尋常中の後身である福山誠之館高校が刊行した「誠之館百三十年史」によれば、98年7月1日、高松中学校から試合の申し込みがあったという。高松中学校生徒30人は職員に引率され和船で福山に到着し8月7日午前7時半から福山中学校校庭で対戦、12-7のスコアで福山が勝った。審判は東京専門学校(現早稲田大学)の学生が務めたという。敗れた高松中学校は2か月後の10月21日、岡山経由で再訪し22日に再び対戦、今度は高松側が勝利した<sup>32)</sup>。

県の東西に位置する広島、福山両尋常中学校が相次いで野球(当時はベースボール)部を組織したのに続いて、明治30年代に入ると尾道商業学校、豊田中学校、県北の日彰館、三次両中学校、広島の私立明道中学校などで野球を楽しむ

む姿が見られた。1888（同21）年公立尾道商業学校として開校し、その後県立移管した尾道商業学校は98年に野球部を創部した。「捕手は撃剣（剣道）の面、胴をつけ、すねにはなぎなたの脚絆をつけた」と部史<sup>33)</sup>は記した。

1898（同31）年開校の第三尋常中学校（後の三次中学校）も草野球から始まり、翌年7月16日初めての対外試合に臨んだ。相手は広島尋常中学校の県北出身者でつくる泰山クラブで37-34で勝っている。ただし翌年3月の再戦では3-36で大敗した<sup>34)</sup>。広島中学校投手田部信秀は香川県丸亀中学校に転校し、後に早稲田大学野球部へ進んで外野手として活躍した。双三郡吉舎町（現三次市）に1894（同27）年開校の私立中学日彰館（後に日彰館中学校）も県北のライバル校、三次中学校としばしば対戦。プレーをめぐるトラブルや応援団のけんか騒ぎも常態化したという<sup>35)</sup>。

1899（同32）年4月30日付芸備日日には「野球合戦」として尾道商業学校と豊田中学校（後に忠海中学校）の試合があったことを報じている。こうして、明治30年代初めには県下の公立中学校に野球部が誕生していったのである。

その足取りは「ベースボール」という英語から「野球」という邦訳を得て、急速に浸透していくのである。

### 4.2 過熱する地方紙の野球報道

図4は1899（同32）年4月3日、広島第一中学校（以下広島一中）で同校と山口県尋常中学校が対戦し19-8で山口が大勝した試合の様子を報じた山口県の防長新聞<sup>36)</sup>の紙面である。

遠征先の広島から帰り、地元新聞の取材に応じたと思われるが、破格の扱いではなかろうか。1面の1段目、左側から2段分を用いて60行（約1,260字）を費やし、イニングスコアまで収容した。前年3度対戦し、全敗に終わっただけに、宿願を果たした山口側の喜びが伝わる紙面展開である。

一方、敗れた広島一中の地元紙、中国新聞の4月5日付紙面が図5である。「野球競技の結果」と題して、「当中学校生徒の失敗に帰せり。山口の生徒は鋭意練習したるの結果ならんか」と手厳しい。行数もわずかに12行しか割かず、敗者に冷たい扱いに見える。

こと野球に対するこうした地元新聞の「肩入



図4 1899年4月8日付防長新聞（山口県尋常中学校-広島第一学校中の試合）

れ報道」は現代にも通じるものがある。120年以前から似たような発想で新聞を制作しているのである。

図6は1901（同34）年8月15日付愛媛県の海南新聞紙面<sup>37)</sup>である。題字のある1面中段に「●松山対広島野球大仕合」の大見出しで大々的に報じている。

1段22字、122行を費やす約2,700文字の長文記事は事細かに試合の流れを追い、ことさらに大げさな美文を駆使し、講談調の文章をつづっている。

「投手羽藤氏が落ち着きすまして繰り出す熱球を、捕手宮田氏が右手を固めて地上に置き、見事なるミットの手さばきと、互いに相応じて軍勢大いに振るう」などの描写が随所に登場する。

この紙面は明治34年8月10日から3日間、松山市の城北練兵場で行われた中等学校野球のゲームを紹介したものである。松山中学校、高松中学校、広島中学校（広島第一中学校を改称）



図5 1899年4月5日付中国新聞

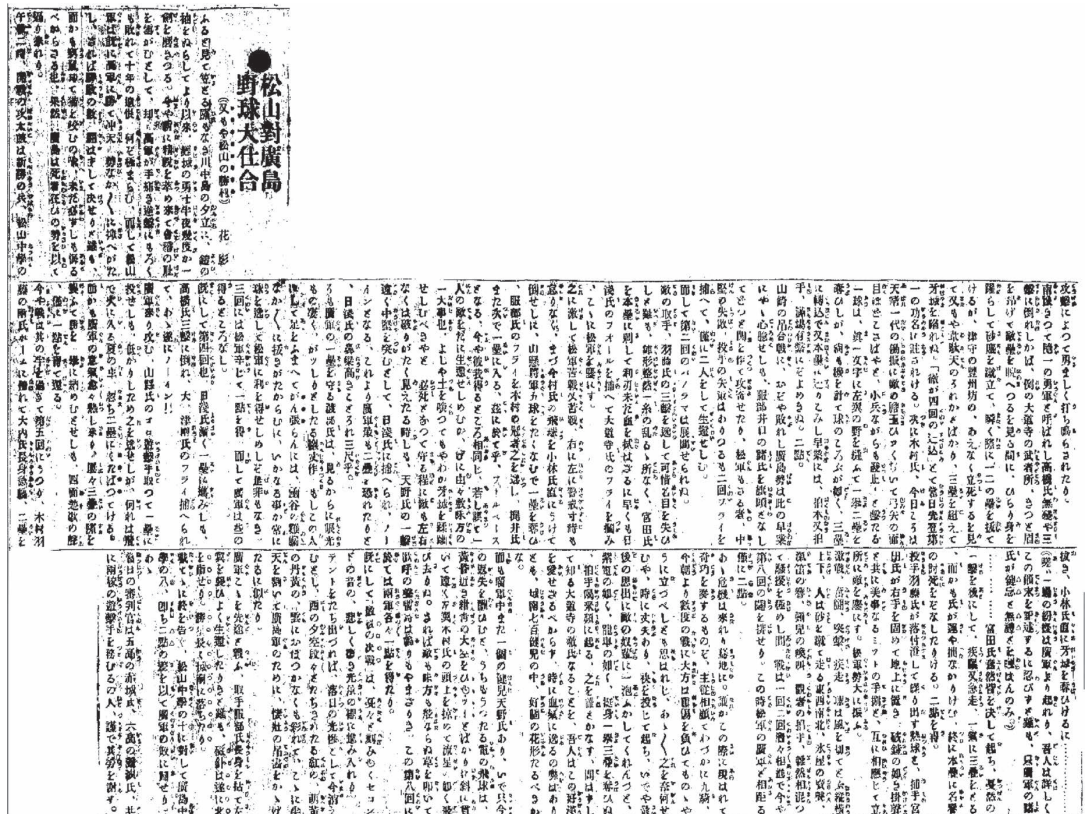


図6 1901年8月15日付海南新聞（松山中－広島中の試合）



と愛媛、香川、広島3県の中学校が集合し8月10日から3日間、画期的な初の3県対校リーグ戦を催した。

対抗戦の発端は熊本の五高生の会話だったという。松山中学校OBが母校野球部の自慢をしたところ、高松中学校OBが反論して口論となり「広島中学校も加えて一戦交えよう」となったのが事の次第という<sup>38)</sup>。

広島中学校は前年、3年生の有志が修学旅行先の高松市で高松中学校生徒とゲームに興じていたが、野球部にとっては初の四国遠征だった。勝手が違ったのか高松中学校に8-16、松山中学校には8-10で敗れた。初の3校リーグ戦を地元紙である海南新聞は1面トップの派手な扱いで報じた。8月10日付の告知記事から15日付の松山-広島戦の詳細に至るまで、2、3日遅れではあるものの連日書き立てた。松山中学校は初戦の高松戦に18-14で勝利をおさめ、最終の広島戦にも勝って1位となっただけに海南新聞の経過記事にもおのずと力が入ったようである。もっとも、敗退に沈む広島中学校の地元紙、芸備日日と中国両紙にはこの遠征結果は載っていない。前述の山口・防長新聞や愛媛・海南新聞の紙面からは、地元球児の活躍を伝えようと、大胆に中学校野球報道に紙面を割く明治期地方紙の傾向がうかがえるのは興味深い。

#### 4.3 競い合う広島地方紙

広島地方に野球が根を下ろし始めるころ、地方新聞界も競争時代を迎えていた。自由民権運動の活発化や帝国議会の開設機運など国民の政治への熱の高まりを背景に、地方でも報道・言論主義を掲げた大小の新聞が創刊されていった。

広島県では1871(明治4年)に新聞の形態をした「日注雑記」が生まれた。しかし、わずか2号で廃刊となり「広島新聞」と改題した。広島新聞は発行元がたびたび替わり、1880(同13)年に廃刊した。旧広島藩士の授産機関、同

進社は1879年に「広島日報」を発刊し、1882(同15)年「芸備日報」と題字を変えた。財政上の理由から一時発行が途絶えたが、1886(同19)年に復刊した。県師のベースボール用品購入記事が載ったのはこのころである。

経営状態が不安定だった芸備日報は、債権者の早速社(早速勝三代表)が引き取り1881(同21)年、芸備日日新聞として再出発した。早速は東京専門学校を出た婿養子整爾を主筆に据えて反政府の論陣を張った。芸備日日は1895(同28)年、1日平均56,369部と部数が急伸し大阪朝日、中央、大阪毎日、萬朝報に次いで発行部数全国5位にランクされた。日清戦争が始まり、広島に大本営が置かれた影響であろう。

一方、同進社の流れをくむ人たちは芸備日日に対抗して1892(同25)年、「中国」を発刊した。紙齢5,000号の1905(同38)年「中国新聞」と改題し、題字は現在も続いている。

芸備日日と中国は何かにつけて対立した。芸備が野党系の立憲改進黨・憲政会寄りの論調を打ち出せば、中国は政府寄りの政友会支持の立場を取った。両社の対立はしばしば選挙の際に際立ち紙面を通しての抗争が続いた。芸備日日の社長、早速整爾は地方政界から国政に進出し衆議院議員となり、大蔵大臣にまで上り詰めた。中国は大正期には政治と距離を置き、芸備攻撃を控えた。皮肉にも早速が政界で重きを置くにしたがって芸備日日に陰りが見え始め、部数は激減。新聞経営に徹した中国と憲政会機関誌としての性格を強めた芸備日日との対立の図式は次第に崩れ、芸備の経営は悪化しやがて昭和初期中国に吸収合併された<sup>39)</sup>。

表1は、明治22年から31年にかけての芸備日日と中国新聞の部数推移である。21年に芸備日報から改題した芸備日日、4年後に創刊した中国ではこの時期、部数に大きな開きがあったことが見て取れる。

こうした中であって両紙の中学校野球に関す

表1 明治期の新聞発行部数の推移

(単位:部)

年	芸備日日新聞		中国新聞	
	年間部数	平均部数	年間部数	平均部数
1889 (M22)	357,371	1,191		
1890 (M23)	383,098	1,276		
1891 (M24)	843,100	2,810		
1892 (M25)	1,024,935	3,416	1,310,000	4,366
1895 (M28)	16,910,752	56,369	2,430,900	8,103
1896 (M29)	13,579,626	45,265	2,297,000	7,656
1897 (M30)	11,272,120	37,573	3,242,302	10,807
1898 (M31)	11,234,299	37,447	4,562,306	15,207

出所:「広島県統計書」から筆者作成。「平均部数」は一日当たりの発行部数



図7 1911年3月11日付中国新聞「今春の野球界」①

る記事は大部分が事前告知、あるいは試合結果のみの短信、雑報記事に終始していた。1903(同36)年には開校直後の広島高等師範学校(広島高師)が春秋の野球大会を催し、岡山の第六高等学校(六高)は1907(同40年)に近県連合大会を始めた。高師の大会が小規模な招待試合だったのに対し、六高大会は岡山、広島両県の

有力校を集めた本格的なものであった。第1回、2回大会を連覇したのは広島中学校だった。野球記事にも変化が生じ、単なる雑報から論評を加えた長編連載記事がこのあたりから登場してきた。

図7は1911(同44)年3月11日付中国新聞の紙面であるが、見出し「今春の野球界(1)」の

右横に「運動界」のタイトルが表記してある。従来、紙面の中に埋没していたスポーツ（野球）記事を、この連載では他と区別している。以後、スポーツの論評や連載記事には「運動界」のタイトルカットを付記した。同様の手法は読売新聞が1906（同39）年の学生野球報道に際して、「運動界」のタイトルを付け、他の記事とは一線を画したのが始まりであり<sup>40)</sup>、中央や地方の各紙がスポーツ欄として追随し、中国も採用したようである。

「今春の野球界」はシーズンを前に広島市内各学校の戦力を分析、展望した5回連載で、従来にはなかった論評記事である。まず高師の戦力を紹介し「この地方の指導者たるべし」と注文、2回以降は各中学校の実力診断に割き広島中学校、明道中学校、修道中学校、県師、広島商業学校の順に戦力を紹介、厳しい批評も加えている。この連載記事以前に芸備日日は1908（同41）年、「広陵の運動界」とする長編記事を1月と5月の2回掲載したが、散発的であった。その点、1911年の中国の連載「今春の野球界」は5回という回数もさることながら、短信・雑報に終始した従来の野球記事から大きく踏み出す内容を盛り込んだものであった。

記事末尾の「涼生」とする筆名から、執筆は入澤涼月（本名・恕次<sup>41)</sup>）と思われる。岡山市で文芸誌を主宰していたが1911年に中国新聞記者となって広島へ移っていた。入社直後の入澤は学校回りと運動を受け持ち、野球の連載を担当した。入澤は古式泳法神伝流の泳ぎ手でもあり、三次支局長や学芸部長を経て1927（昭和2）年に新聞社を退社後、広島游泳協会（後に広島游泳同志会）の運営に尽力している<sup>42)</sup>。日本泳法のスイマーでもあった入澤だけに、スポーツを見る目はある意味確かだったのかもしれない。

## 5. ま と め

広島野球「事始め」を明治期の新聞を手掛か

りにたどった。従来の通説であった「1889（明治22）年頃」とする広島尋常中学校野球部報の記述に対して、既にその3年前の1886（同19）年、県尋常師範学校（県師）が西洋遊戯器「ベースボール」1組を購入していた事実を当時の「芸備日報」が報じていた。県師生徒がゲームに興じたか否かは別として、この時点で野球用品が広島に届いていたことになる。

当時、広島尋常中学校と県師は同じ校地だった。とすれば、県師購入の野球用品は隣の中学生の目にも止まり、やがてノックやゲームとして広まっていったことは容易に想像できる。尋常中学校校内雑誌「鯉城」の野球部報は「明治25年10月ベースボール（野球）会を組織し」と記述。やがて、1893（同26）年、県参事官の離任に際して、両校生徒らが送別試合に臨んだとする記事（4月6日付芸備日日新聞）につながるのである。県師が用具を購入し、広島尋常中学校に愛好者が集い、やがて試合に発展していったのである。このあたりが広島野球の出発点であろう。

以後の新聞紙面を通して野球記事を拾い集めれば、広島野球発展の骨格が見えてくる。先輩格の広島中学校を中心に、県東部では福山中学校、尾道商業学校、豊田中学校（後の忠海中学校）に野球部が生まれていく。県北部には私立日彰館（同、日彰館中学校）に対抗して三次中学校にも誕生し、両校はしばしばけんか腰の対戦を演じた。広島市ではその後、明道中学校、仏教中学校（同、崇徳中学校）、修道中学校など私立中学が野球部を結成、広島商業学校は1899（同32）年開校と同時に有志が野球を始めている。

広島の中学校野球は対校試合を繰り返しながら、腕を磨いていったようだ。その成果が岡山・六高主催の近県連合大会で広島中学校が1907（同40）年の第1回から2連勝し、実業団の呉海軍工廠に鍛えられた呉中学校が1910（同

表2 明治期の県内中等学校の野球部設立状況

校名	現在の校名	開校（設立）	野球部創部	備考
広島県師範学校	広島大学教育学部	1877（M10）	1892（M25）	1886（M19）ボール、バットを購入
県立広島中学校	広島国泰寺高等学校	1877（M10）	1892（M25）	1889（M22）年ごろから盛ん。
県立福山中学校	福山誠之館高等学校	1879（M12）	1893（M26）	校友会遊技部（ベースボール）発足
県立尾道商業学校	尾道商業高等学校	1887（M21）	1898（M31）	1898（M31）に県へ移管、県立に
私立日彰館	日彰館高等学校（県立）	1894（M27）	1897（M30）頃	1902（M35）中学校に昇格
県立忠海中学校	忠海高等学校	1897（M30）	1898（M31）	豊田中から1891（M34）校名改称
私立明道中学校	（廃校）	1897（M30）	1899（M32）頃	1923（T12）に廃校
県立三次中学校	三次高等学校	1898（M31）	1899（M32）	校友会武技部内に野球
県立広島商業学校	広島商業高等学校	1899（M32）	1899（M32）	1901（M34）市立から県立移管
私立仏教中学校	崇徳高等学校	1901（M34）	1901（M34）頃	僧侶子弟に1877（M10）設置
私立修道中学校	修道高等学校	1905（M38）	1908（M41）	1887（M20）修道学校から中学に
私立広陵中学校	広陵高等学校	1907（M40）	1911（M44）	1896（M29）私塾数理学会発足
県立呉中学校	呉三津田高等学校	1907（M40）	1907（M40）	呉市立から1911（M44）県立移管

出所：「県別全国高校野球史」「広島県高校野球五十年史」各校校史、部史を参考に筆者作成

43) 年、11年と連覇を果たした。大阪朝日新聞社が1915（大正4）年に始めた第1回全国中学校優勝野球大会（後の全国高校野球選手権大会）山陽代表は広島中学校、翌2回大会は広島商業学校であり、以後連綿と広島勢の活躍へとつながっていくのである。

## 注

- 1) 1874（明治7）年、官立広島外国語学校として創設し県立移管の後77（同10）年11月7日「広島県中学校」と改称、広島県最初の県立中学校となった。その後、県立広島中学校、県立広島尋常中学校、県第一尋常中学校、県第一中学校、県立広島中学校、県立広島第一中学校とたびたび校名が変わった。戦後の学制改革で1948年に鯉城高等学校となり、49年から広島県国泰寺高等学校、68年に広島県立広島国泰寺高等学校となった。
- 2) 広島県体育協会『広島スポーツ史』（1984）、広島県高等学校野球連盟『広島県高校野球五十年史』（2000）など、広島県の野球の起源を「鯉城」記述に依拠している。
- 3) 1874（明治7）年、官立広島師範学校として設置、白鳥学校を経て77（同10年）3月に県師範学校と改称。一時、県尋常師範学校と名乗ったが、98（同31）年再び県師範学校となった。戦後の1949年、国立学校設置法により広島大学教育学部に包括した。
- 4) 日本体育協会編『最新 スポーツ大事典』大修館書店（1987）pp. 266-268、日本には後述の体操伝習所教師、リーランドが1878（明治11）年に伝えたという。
- 5) 『文部省教育品陳列場出品目録』（国立国会図書館デジタルコレクション）に、第2回内国勸業博覧会の文部省関係教育項目に体操伝習所所有運動用品も展示された。体操伝習所は1878（明治11年）に開設し86（同19）年、（東京）高等師範学校体育専修科に改組された。
- 6) 1999年12月6日-17日、筑波大学中央図書館で開催の「身体と遊戯のまなざし-日本近代体育黎明期の体操伝習所」展目録によれば、伝習所の米国人教師リーランドや米留学経験のある教師、坪井玄道らが運動用品製造を注文、指導したという。
- 7) 君島一郎『日本野球創成記』ベースボール・マガジン社（1972）pp. 16-26。同書も前述、「文部省教育品陳列場出品目録」にある体操伝習所の野球用品を詳述している。
- 8) 明治15年『東京師範学校年報』（1882）p. 874
- 9) 明治17、18年『体操伝習所一覽』、明治45年『東京高等師範学校一覽』の卒業生一覽表による。三次信浩『日本師範教育史の構造』「第1章初等師範教育の系譜-広島県師範学校の教育実践」東洋館出版社（1991）p. 50にも記述がある。
- 10) 『東京音楽学校一覽』（大正15年版）音楽伝習生名簿 p. 52
- 11) 明治32年5月発行の『広島県師範学校第二十五年一覽』によれば、竹本は明治10年12月24日下等科（卒業生20人）、同11年7月15日上等科（同10人）を卒業している。同13年11月、県師範学校に

- 採用され、7年間助教諭の職にあった。
- 12) 広島県師範学校『六十年回顧録』(1935)旧職員一覧 p. 362. 鯉城同窓会『鯉城同窓会名簿』(1998)旧職員一覧 p. 19. 鯉城同窓会は旧制広島一中、鯉城高、広島国泰寺高の卒業生で組織する。
  - 13) 大蔵省『職員録』明治30年(乙) - 明治35年(乙)、広島県の項
  - 14) 鈴木康允、酒井堅次『日本で初めてカーブを投げた男 道楽大尽平岡鯉の伝記物語』小学館(2000) pp. 88-127. 鉄道技師尾の平岡は明治9年に米国学留学から帰国し、本邦最初の野球クラブチームを結成、専用球場も造るなど普及発展に尽力した。
  - 15) 神田順治『新判 野球殿堂物語』ベースボール・マガジン社(1989) pp. 55-58
  - 16) 伊東 明『上智大学体育 第9号』(1976) pp. 9-77に収録。北は北海道毎日新聞から九州の福岡日日新聞まで中央紙10紙と地方紙41紙から明治期の野球記事440項目を抽出した。
  - 17) 前掲書、『日本野球創成記』 pp. 53-57. 「野球」の名付け親とされる中馬庚(ちゅうまん・かのえ)は旧制一高野球部OBで、部史編集の依頼を受けた1895(明治28)年、「野球」の邦訳を生み出した。城井睦夫『野球の名付け親 中馬庚伝』ベースボール・マガジン社(1988)に詳しい。
  - 18) 木村 毅編『明治文化資料叢書 第10巻』風間書房(1972)所蔵「正岡子規野球文献」の「常磐会寄宿舎の遊戯」p. 249. に明治23年3月21日に上野公園横の空き地で野球を楽しむ寄宿舎生を写真、その中に投手佃 一予投手(当時、東京帝大法科学生)の名前がある。
  - 19) 広島県立広島国泰寺高校百年史編集委員会『広島一中国泰寺高百年史』(1977) p. 43. 広島尋常中は1891(明治24)年、国泰寺村に校舎を新設移転し、県尋常師範は1901(同34)年、皆実村へ校舎移転した。
  - 20) 前掲書、『広島一中国泰寺高百年史』 p. 42
  - 21) 『東京帝国大学一覧 明治26年』「駒場農学校卒業生一覧」p. 459
  - 22) 庄野義信編『六大学野球全集 上巻』「第一高等学校野球部史」改造社(1931) p. 13には吉田の駒場農学校同期生で田原休丞、知識四郎、伊地知徳之助の記載がある。
  - 23) 前掲書、『東京帝国大学一覧 明治26年』「駒場農学校卒業生一覧」
  - 24) 定宗一宏「広島英学史の黎明 - 広島外国語学校・英語学校」『広島市公文書館紀要第12号』(1989) p. 64. 広島英語学校職員生徒年表(明治7-9年)に2人の名前が列記してある。同英語学校は明治10年に官立から県立移管後廃校となり、直ちに広島県中学校と改称した。のちの広島県立中学校である。
  - 25) 広島県立第一尋常中学校同窓会(のちの校友会)は1897(明治30)年、校内雑誌「鯉城」を創刊した。創刊号巻末の「同窓会野球部規則 第9条」p. 64に、野球用具の貸し出し規定がある。規則に違反すれば「以後野球器具を使用することを許さず」とある。
  - 26) 百周年記念史編集委員会編『百年史 兵庫県立農業高等学校』同記念事業委員会(1998)「歴代校長素描 初代・4代校長吉田彦松」 pp. 65-67. 吉田は明治30年、兵庫県立農学校の初代校長となり、大正7年まで通算17年間校長を務めた。
  - 27) 作道好男・作道克彦『大学の歴史 大阪府立大学農学部』教育文化出版(1983) p. 97. 片田は鹿児島県技師を経て1915年大阪府立農学校長となり、10年間校長を務めた。同農学校は戦後、大阪府立大学農学部となった。
  - 28) 森岡 浩は全国47都道府県の高校野球の歴史を網羅し『県別全国高校野球史』東京堂出版(2001)として、詳述している。松山中学校の野球は俳人の正岡子規が伝授したという。
  - 29) 前掲書、『鯉城 第1号』「野球部報」p. 58
  - 30) 広島出身で東京帝大法科大学生の時、芸備協会経営の「修道館」に寄宿した。『人事興信録 8版』(1928)によれば、卒業後司法官となり台湾総督府高等法院判官などを務めた。
  - 31) 福山誠之館野球部創部百年記念誌編集委員会『誠之館野球部創部百年記念誌』(1992) p. 1
  - 32) 誠之館百三十年史編纂委員会『誠之館百三十年史 上巻』福山誠之館同窓会(1988) pp. 585-587
  - 33) 林勲編『尾商野球部史 思い出の野球』(1983) p. 2
  - 34) 「巴峡六十年」刊行会『巴峡六十年』三次高校同窓会(1960) pp. 29-31
  - 35) 百年史編集委員会編『日彰館 百年の歩み』日彰館同窓会(1994) pp. 45-48
  - 36) 防長新聞は山口県の県都山口町(現山口市)で1884年創刊の地方紙。1942年新聞統合令によって他紙と統合したが、1945年に復刊。経営不振により1978年廃刊した。
  - 37) 1877年に愛媛新聞から海南新聞に改題した愛媛県の地方紙。1944年県内各紙と統合して再度「愛媛新聞」と改題し、代表的な県紙として現在に至っている。
  - 38) 愛媛新聞社『愛媛の野球100年史』(1994)「明治《黎明期》」 pp. 137-138
  - 39) 高洲一美「広島県新聞史」『地方別日本新聞史』日本新聞協会(1956) pp. 373-381
  - 40) 1906年10月2日付読売新聞は早稲田対学習院の野球試合など運動短信4本で構成したコーナーを「運動界」と名付けた。以後、野球記事を中心とするスポーツ欄に「運動界」のタイトルカットを使用した。
  - 41) 中国新聞社史編纂委員会『中国新聞80年史』中国新聞社(1972) p. 83
  - 42) 中国新聞退社後の入澤が自費出版した『水泳随録・水鳥の跡』(1935)に、後輩の運動記者藤井猪勢治は「広陵最初の運動記者」とする一文を寄せ、スポーツ記者としての力量を高く評価した。

## 参 考 文 献

- 伊東 明 (1976) 「体育・スポーツ資料集 明治時代の新聞記事 野球編 I」『上智大学体育 第9号』上智大学
- 入澤涼月『水泳随録・水鳥の跡』(1935) 自費出版 愛媛新聞社 (1994) 『愛媛の野球100年史』
- 神田順治 (1989) 『新判 野球殿堂物語』ベースボール・マガジン社
- 君島一郎 (1972) 『日本野球創成記』ベースボール・マガジン社
- 木村 毅編 (1972) 「正岡子規野球文献 常磐会寄宿舎の遊戯」『明治文化資料叢書 第10巻』風間書房
- 作道好男・作道克彦 (1983) 『大学の歴史 大阪府立大学農学部』教育文化出版
- 定宗一宏 (1989) 「広島英学史の黎明—広島外国語学校・英語学校」『広島市公文書館紀要第12号』広島市公文書館
- 庄野義信編 (1931) 「第一高等学校野球部史」『六大学野球全集 上巻』改造社
- 城井睦夫 (1988) 『野球の名付け親 中馬庚伝』ベースボール・マガジン社
- 人事興信所編 (1928) 『人事興信録 8版』(1928) 人事興信所
- 鈴木康允、酒井堅次 (2000) 『日本で初めてカーブを投げた男 道楽大尽平岡燾の伝記物語』小学館
- 誠之館百三十年史編纂委員会 (1988) 『誠之館百三十年史 上巻』福山誠之館同窓会
- 中国新聞社史編纂委員会 (1972) 『中国新聞80年史』中国新聞社
- 「巴峡六十年」刊行会 (1960) 『巴峡六十年』三次高校同窓会
- 日本新聞協会編 (1956) 『地方別日本新聞史』日本新聞協会
- 日本体育協会編 (1987) 『最新 スポーツ大事典』大修館書店
- 林 勲編 (1983) 『尾商野球部史 思い出の野球』
- 百周年記念史編纂委員会編 (1998) 『百年史 兵庫県立農業高等学校』同記念事業委員会
- 百年史編纂委員会編 (1994) 『日彰館 百年の歩み』日彰館同窓会
- 広島県高等学校野球連盟 (2000) 『広島県高校野球五十年史』
- 広島県師範学校 (1935) 「旧職員一覧」『六十年回顧録』
- 広島県体育協会 (1984) 『広島スポーツ史』
- 広島県立第一尋常中学校同窓会 (1897) 『鯉城』創刊号
- 広島県立広島国泰寺高校百年史編纂委員会 (1977) 『広島—中国泰寺高百年史』

福山誠之館野球部創部百年記念誌編纂委員会 (1992) 『誠之館野球部創部百年記念誌』

三好信浩 (1991) 「第1章 初等師範教育の系譜—広島県師範学校の教育実践」『日本師範教育史の構造』東洋館出版社

森岡 浩 (2001) 『県別全国高校野球史』東京堂出版

鯉城同窓会 (1998) 「旧職員一覧」『鯉城同窓会名簿』

<ウェブサイト>

・国立国会図書館デジタルコレクション

印刷局 (1911) 「広島県」『職員録 明治30年乙～35年乙』

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/779775~779783>

体操伝習所『体操伝習所一覧 明治17—18年』卒業生名簿

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/812938>

筑波大付属図書館特別展目録「身体と遊戯のまなざし—日本近代体育黎明期の体操伝習所」(1999)

<https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/exhibition/shintai-to-yugi/welcome.html>

東京音楽学校 (1893) 『東京音楽学校一覧 明治22—23年』卒業生名簿

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/813014>

東京高等師範学校 (1913) 『東京高等師範学校一覧 明治45年』卒業生名簿

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/939506>

東京帝国大学 (1894) 『東京帝国大学一覧 明治26年』駒場農学校卒業生一覧

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/813170>

日本帝国文部省第11報 (1882) 『東京師範学校年報』(1882)

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/809156>

広島県師範学校 (1899) 『広島県師範学校第二十五年一覧』卒業生名簿

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/813332>

広島県統計書 (明治22—31年)

<https://www.pref.hiroshima.lg.jp/soshiki/21/toukeisyo1.html#m22~31>

文部省『文部省教育品陳列場出品目録』(1881)

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/809317>

<新聞>

海南新聞 (1901年8月15日付, p. 2)

芸備日日新聞 (1893年4月5日付, p. 1, 同6日付, p. 1, 1896年11月2日付, p. 2, 1897年4月25日付, p. 1, 同8月25日付, p. 1, 1898年7月12日付, p. 3, 同8月11日付, p. 1, 1989年4月30日付, p. 3)

芸備日報 (1986年10月28日付, p. 1)

中国新聞 (1897年4月25日付, p. 1, 同6月15日付, p. 1, 1899年4月5日付, p. 3, 1911年3月11日—15日付, p. 1)

防長新聞 (1899年4月8日付, p. 1)